

負ける力

東尾 修

Higashio Osamu

まえがき

247敗は251勝の礎

「247」——この数字は、私が投手として積み重ねた「負け」の数で、日本プロ野球では歴代4位の記録である。勝利数というと「251」で、かろうじて負け数を4つ上回っている。

言うまでもないが、「負けてもいい」などと考えてマウンドに上がったことは一度もない。私は投手としては小柄で、おおたにしょうへい大谷翔平やささき佐々木朗希ろうきのようにプロの打者を圧倒できる速球も持っていなかった。「どうやったら負けないか」を人一倍考え、工夫と努力を重ねることで、20年にわたって数々の強打者たちと渡り合ってきた。それだけに、1敗の悔しさも人一倍だった。

自信を粉々に打ち碎き、限界を思い知らされながら重ねてきた敗戦の一つひとつを、今の私は誇りとともに思い返すことができる。なぜならそれは、「私に251の勝ち星を与え、優勝の美酒を何度も味わわせてくれた礎」^{いしずえ}にほかならないからだ。

1969年、高校を卒業してドラフト1位で入団した九州の西鉄ライオンズは、50年代の黄金期はすでに過去のものとなり、低迷期の入り口にいたチームだった。私自身、プロで通用するようなスピードもコントロールも持ち合わせていなかったが、球界のみならず日本全体を揺るがせた「黒い霧事件」のために主戦級を失ったチームでは、打たれても打たれても投げ続けるしかなかった。

力が足りないことを誰よりも知りながら、先発投手としてマウンドに上がり、援護射撃も受けられず、つるべ打ちに遭う。だからといって、「負けて当然」などとはどうしても思えず、力不足を補う術^{すべ}を求めて試行錯誤を重ね、やがて何とか強打者たちと渡り合うことができるようになった。

負けに鍛えられたからこそ続けることができた

しかし、西鉄ライオンズは経営悪化から身売りをを行い、1973年に太平洋クラブライオンズ、77年にクラウンライターライオンズと名前を変えていった。「ライオンズ」という名前だけは存続したものの、私がプロ入りしてからの九州時代の10年間で3位が一度だけ、あとはすべてBクラスの低迷にあえいでいた。

それでも私は、75年と78年にシーズン23勝を挙げるなど、7シーズンで2桁勝利を記録した。一方で、10年間での勝敗は128勝144敗と、16も負け越している。通算成績が4つ勝ち越しになっているのは、チームが西武に売却され、79年に埼玉県所沢市に本拠地を移してからの10年間で20勝の貯金を作れたからだ。ただ、もし九州時代の経験がなければ、これほどの成績は挙げられなかっただろうし、もっと早く現役を退いていたと思う。

実際、若い頃の私は30歳を過ぎたら引退しようと考えていた。それでも弱小球団にあって勝とうと懸命にあがいていたからこそ、体力面での衰えを知恵と技術でカバーすることができたのだと思う。その原動力は、負けることへの耐え難い悔しさにほかならなかった。若き頃の「負け」に鍛えられたからこそ、80年代に黄金期を迎えた西武ライオンズにあっても、その中心メンバーであり続けることができた。裏返せば当時のライオンズは、過

去の実績以外これといって突出するものがない投手に、ローテーションの一角を任せるようなチームではなかった。

努力のともなわない勝利に価値はない

最近、教育や社会から「勝ち負け」の要素が排除されているように感じる人が多い。運動会のかっこでも、「一等」「二等」という言い方はせず、勝負ではなく一人ひとりが日頃の努力の成果を見せる場となっている、という話を耳にする。

半面、ことに子どものスポーツでは勝利が過度に重視され、体の小さな子や発育の遅い子は出場機会を与えられず、成長が早く能力が高い子は酷使され、そのために故障や障害を抱えるジュニア選手が増えているとも聞く。少年野球でも、指導者が勝ちたいばかりに選手にバントを命じ、低学年からサインを覚えさせ、ストライクが入るように投手にセツトポジションを強いる、そんな指導を何度となく目にした。

子どもは、大人のミニチュアではないし、自己満足の道具でもない。私にはそんな指導は、まったくのナンセンスに思える。

どうも「勝ち負け」の扱いがアンバランスになっている、そんな気がしてならない。勝ち負けは人間の優劣を意味するものではないし、その後の人生を決定づけるものでもない。勝利そのものに価値があるわけでも、敗北がその人の価値を下げるわけでもない。

ではどこに価値があるのか。それは自分を信じ、勝利を目指して努力し、工夫を重ねることにあるのだろう。努力のともなわない勝利に価値を見いだすことなど、私にはできない。

誰にでも勝つ権利と、負ける権利がある。「負け」こそが、その人を成長させる糧となり、その負けの悔しさを乗り越えるためには「勝利」の味を知る必要がある。勝ち続けるだけ、負け続けるだけの人間に、成長のチャンスはめぐってこない。

人から成長の機会を奪うような勝利至上主義に、私は明確に反対する。しかし、社会から勝ち負けの要素を排除し、見た目だけの平等を重んじる向きにも、疑問を感じる。正面から勝ち負けと向き合い、負けから何かを掴むことを称賛する機運こそが、人々を成長させ、自分自身を乗り越えさせるのではないだろうか。

負けが持つ「力」

負けるということは、大なり小なりの挫折であることは間違いない。それは人を奮い立たせるばかりではなく、むしろ心を打ちのめし、再起への道を断とうとする傷になることもあるだろう。私の選手時代はとにかく負けに立ち向かうことばかり考えていたので、そのようなことは思いもしなかった。

しかし、監督としてチームを率いてみると、考え方が変わった。屈強な精神を持つているように思える選手でも、一つの負けから齒車が狂いだし、ついに元には戻らなくなる。そんな選手を何人も目にすることになった。指導者としては、あまりにも辛く齒がゆく、自らの無能を噛みしめるほかなかった。

そんな経験から私は、負けから何かを学び、何かを得るためには、それなりの思考と技術が必要ではないかと考えるようになった。そうであれば、私の247度の負けも、何かの教材になるかもしれない。

ましてや、私が西武ライオンズの監督を務めた95年からの7シーズンは、80年代黄金期からの転換を果たす時期と重なり、苦汁を嘗める場面も少なくなかった。監督としての

425の敗北もまた、負けが持つ「力」を伝えるものになりうるのかもしれない。そんな
思いから、私は筆を執った。

すべての負けに潜む「価値」は、見かけだけの「勝ち」よりもずっと尊い。私はそう信
じている。

目次

まえがき

247 敗は251勝の礎／負けに鍛えられたからこそ続けることができた／努力のともなわない勝利に価値はない／負けが持つ「力」

3

第1章

負けで始まった人生——プロ入りまで

13

教えずぎることへの違和感／短い右腕のエース／プロ野球選手になった理由／猛練習をする意味／初めての甲子園出場／4日の試験を2日でギブアップ／強打者・東尾、プロ入りへ

第2章

負け続けた新人時代

25

「青天の霹靂！」の西鉄入団／ピッチャーは走り込みがすべて／投手失格、野手転向を申し出る／「黒い霧」の衝撃／強心臓の大エース——池永正明／池永さんとの師弟関

第3章

常勝軍団の一員として——西武時代

係／ケンカ投法の始まり／インスラの発明／稲尾さんのビンタ／負け犬集団の中で／球団の身売り／盟友・加藤初／新球団誕生——バイト（！）する選手たち。弱小貧乏球団の悲哀は続く／「西鉄の象徴」がチームを去った日／エースたちの調整法／サラリーマンと変わらない拘束時間／九州時代最大のチャンス／勝てないチームのエースとして何をすべきか？／幸運なキャリア／「人寄せ策」の不発と再度の身売り／サイン、クセ、そして盗塁王との駆け引き／「寝業師」の時代——九州時代の終焉

30歳を前にしての単身赴任——福岡から埼玉へ／新球団・広い新球場での船出／屈辱の開幕8連敗／勝ち始めた西武／根本監督——寝業師の素顔／将来の大投手——工藤公康の強硬指名／広岡監督との確執、そして勝利の美酒／リリーフで擱んだ日本シリーズ MVP／監督への怒りが生んだ MVP／巨人との死闘／広岡監督が初めて放った冗談／巨人を破ったの2年連続日本一——江夏と広岡監督の確執／200勝を達成／猛虎旋風と広岡時代の終わり／森監督就任／絶対には逃げるな——乱闘事件のあとも投げ続ける／初めて日本シリーズの先発マウンドへ／日本シリーズ第8戦に突入／二度目の MVP。そして思わぬ落とし穴／ライオンズ一筋で引退

第4章

監督就任——新たなる挑戦

予想外の監督就任／主力選手が去ってしまった……／再生ならなかった清原の退団／ニュースター誕生／監督初栄冠の明と暗／渡辺久信への戦力外通告／西崎幸広の加入／投手育成の哲学／ピッチャーは総じて「強気」／史上最大の混戦、そして連覇／監督という立場——やり手のオーナーとの付き合い方／堤さんとの思い出／松坂に渡した200勝記念ボール／「大輔ファイバー」という社会現象／ベールを脱いだ平成の怪物／スピードガンの数字はウソ？／貧打に泣いた一年／退任、そして次の人生／野球への思いは変わらず——これまでの経験をどう伝えるか？

第5章

特別対談 東尾修×工藤公康 負ける力と勝つ力

時代が大きく変わったことを実感／「はい」と「いいえ」しか言うな／盗んで、考えて、モノにする／ピッチャーの「指先」／「負け」と向き合う心／育てながら勝つ

あとがき

第1章 負けで始まった人生——プロ入りまで



「ピッチャーとしては手も小さく、指も短い。ただし関節は柔らかいので、プロに入ってからシュートやスライダーの習得であまり苦労したことはないが、フォークボールのように挟む球種は投げられなかった。とはいえ、誰だって身体に合ったスタイルを身につけるしかないのだから、ハンディキャップだと感じたことはない」

教えすぎることへの違和感

河原や空き地でやる三角ベース、ご多分に洩れずそれが野球人生の始まりだった。上級生も下級生も交じって、軟式テニスボールと竹バットで、日が暮れるまで夢中になってやっていたものだ。ポジションも順繰りに交代するから、ピッチャーがやりたいとかサードがいいとか、考えたこともなかった。作戦も何もあつたものではない。でも、それで野球が好きになったことは間違いない。

今、孫の野球チームに手伝いに行くと、バントだのエンドランだの、監督がサインを出すことに驚いてしまう。私は必要とは思わないが、それでも小学5、6年生にやらせるのは、まだ理解はできる。しかし、2年生や3年生にもバントやエンドランのサインを出す。

どう見ても、野球の専門技術を身につけられるような体力や理解力があるとは思えないし、この年代でそれをやらせることが将来的にプラスになるとも思えない。キツイ言い方かもしれないが、指導者の自己満足に子どもたちが付き合わされているように映るのだ。脱線ついでもう一ついえば、ピッチャーがことごとくセットポジションで投げるのも気になる。おそらく、そのほうがコントロールが良くなるのだろうが、体全体を使うこと

を先に覚えないと、あとからは修正できなくなるだろう。はじめは体を大きく使い、体ができてくるにつれて細かい技術を習得していくのが理にかなっているはずで、細かいことを先に覚えてから、そのあとで体全体を使おうとしても、手遅れになる可能性が高い。

そもそも、大きく育つか小兵こひょうになるか、小学生の段階でわかるはずもない。全員が甲子園を目指すわけでも、プロ野球を目指すわけでもないのだから、入り口ではまず楽しさを教えて、野球を好きになるような練習をしてほしいと思う。

短い右腕のエース

私自身は中学で野球部に入り、初めてユニフォームを着た。すぐにレギュラーになれたわけではないが、いろいろなポジションを練習する中で、ピッチャーとして見込みがあるということになった。ただ、中学に入ってすぐに右腕の肉離れをしてしまい、半年ほどまったく右腕を使えない時期があった。そのため右腕だけ成長が止まり、今でも右腕は左腕よりも1〜2センチほど短い。それがピッチングに影響したかどうかは、自分ではわからない。

ついでに言えば、ピッチャーとしては手も小さく、指も短い。ただし関節は柔らかいので、プロに入ってからでもシュートやスライダーの習得であまり苦労したことはないが、フオークボールのように挟む球種は投げられなかった。とはいえ、誰だつて身体に合ったスタイルを身につけるしかないのだから、ハンディキャップだと感じたことはない。

プロ野球選手になれた理由

当時の中学野球は、現在のように試合数や大会数が多いわけではなかったが、それでも2年、3年と投げ続けるにつれて、少しずつ自信もついてきた。

ある時、箕島みのしま高校の近くで試合をすることがあり、翌年から監督に就任する尾藤公びとうただしさんが試合を見に来ていた。その試合での私のピッチングが印象に残ったらしく、直々じきじきに箕島高校への誘いを受けた。その時、すでに京都の平安へいあん高校（現・龍谷大平安高校）への入学を決めており、下宿も決め、布団を送り、仕送り用の口座まで作っていた。私自身も平安高校に行きたかったのだが、尾藤さんの誘いは熱心で、とくに初孫を手元においておきたいと願う祖父母には、強く響いたようだ。

結果、突然の進路変更となったが、平安高校には池田^{いけだ}信夫^{のぶお}という左腕の好投手が同じ年に入学したので、平安高校へ行っていたら私はピッチャーにはなれなかっただろう。偶然の縁と尾藤さんの指導があったからこそ、私はプロ野球選手になったのだと思う。野球に限らず、このような運命のあやというようなものは、これまでの人生で何度か起こっている。

1年生は基本的に球拾いだが、合間にピッチャーの練習もさせてもらえた。初めて硬球で野球をし、恐怖感も相当にあったので、球拾いを嫌だと感じたことはない。1年上の先輩に良いピッチャーがいたので、2年秋まではエースになれなかった。それよりも上級生の練習についていくのに必死で、エースになりたいなどと考える余裕もなかった。どちらかといえばバッティングのほうが自信もあり、大学ではサードをやりたいとぼんやり考えていた。

猛練習をする意味

練習中の水飲みは厳禁、隠れてドブの水でも飲んでバレようものならケツバットなどと

いう風潮は、現在の常識からすれば「厳しい」「ありえない」ということになるのだろう。ただ、私はそれ以外の練習風景を知らなかったもので、当時厳しいと思ったことはあまりなかった。

初めて自分に厳しく練習を課すようになったのは、甲子園を目指せるようになった3年生からだたと記憶している。結局のところ、どんなにチーム練習が厳しかろうが、自分で意識しないと猛練習も意味をなさないということははっきりと言える。

数えてはいないが、投球数はおそらく1日100球程度だったのではないか。ただし休みはないので、1週間で700球は投げることになる。

初めての甲子園出場

エースで四番として出場した2年生の秋季近畿大会では、1回戦の東山高校（京都府）と準々決勝の甲賀高校（滋賀県、現・水口高校）をノーヒットノーランで抑えた。2回のノーヒットノーランで全国的にも注目されるようになり、自分としてもプロ入りを意識し始めた。

しかし平安高校との決勝戦では池田信夫との投げ合いの末に敗れ、準優勝に終わった。ただし、この成績により、翌春の全国選抜高等学校野球大会への出場が認められた。箕島高校にとっては初の甲子園だった。

1968年春の選抜ではあれよあれよと準決勝まで進み、埼玉の大宮工業高校と対戦した。2回までに3点を先制するものの、相手エースの吉沢敏雄よしざわとしおさんに抑えられ追加点を奪えず、8回に逆転されて3対5で敗退した。結局、大宮工は決勝も勝ち、優勝した。「自分たちが準決勝で勝っていたら、どうなっていたか」とも思うが、夏の県大会では2回戦で負けているだけに、チーム力の面でいえば、まだ本物ではなかったのかもしれない。

尾藤監督はそのあとに甲子園で四度の優勝を果たしたが、2011年に亡くなるまで1968年のチームが最強だったと話していたという。

ちなみに選抜では2回戦まで五番、準々決勝からは四番を打って15打数7安打1本塁打という成績だった。当時はまだ木製バットで、高校野球に「経済的理由」で金属バットが導入されたのは6年後のこと。ホームランはなかなか打てない時代の成績である。

負ける力

東尾 修

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：924 円 (10%税込)

発売日：2023 年 10 月 6 日

I S B N：978-4-7976-8131-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)